

【2年生活】 まちづくりでつながっていく子どもたち 指導者：丹 理人

研究の実践

1 単元「冬のすてき見つけたい～2Cスノータウン～」

2 授業の実践

(1) まちに溶け込んでいく雪のオブジェ

今年度は暖冬で雪遊びが数えるほどしかできなかった。そんな中でも「みんなで冬を楽しもう」と始まったのが本単元である。身近な材料を使って仮想の冬のまち「2Cスノータウン」を作り、みんなで遊ぶことをめあてて活動を進めていった。

2Cスノータウンでみんなで遊ぶ本番の日が来た。A児はスズランテープの温泉に入り、自分の作った雪のオブジェをうっとりとした表情で見つめていた。「温泉からオブジェが見えて最高！」そんなA児の声が聞こえてくるようだった。単元の始め、オブジェ作りはA児が一人で進んでいた。新聞紙やガムテープなど身の回りの材料で、ごつごつとした怪獣の足を作ろうと試行錯誤していた。その熱量に引き込まれるように、仲間が増えていった。「足の角度を変えたら安定するかな?」「尻尾を伸ばせばバランスが良くなるよ!」3人で相談しながらダイナミックなオブジェを完成させた。

単元の中ほどにスノータウンで試し遊びをした。オブジェはスノータウン中央でみんなの活動を見守っている。なまはげに扮した子どもがまちを闊歩し、お化け屋敷には行列ができていた。しかし、私にはオブジェがまちの中央で少し寂しそうに立っているように感じられた。そこで、子どもたちが一体となり、まちを盛り上げようという意識を高めることをねらい、「もっとまちをよくするために、お互いにアドバイスしよう。」と声を掛けた。B児から「オブジェは温泉の近くに置いたらいいんじゃないかな?」という意見が出された。A児はまちのセンターの座を下ろされるようで、少し抵抗がある表情。「どうして温泉の近くがいいの?」と問い返すと、「温泉からオブジェが見えたら、高級旅館みたいだから!」という返答。そして本番、多くの子どもたちが温泉で温まりながらオブジェを見ていた。多くの友達に見守られながら、オブジェはまちのシンボルになっていった。

「みんなで楽しめるまちを」という意識を共有しながら学習を進めたことで、仲間の作品をまちの中で輝かせようとする発言が生まれた。そして、スノータウン本番の温泉でのA児の表情につながったのである。



(2) 学級全体でつくり上げた獅子舞パフォーマンス

C児は獅子舞の被り物を、D児はなまはげのお面をこだわって作ってきた。試し遊びの日、C児は獅子舞に扮して友達の頭に噛みつき、D児のお面を友達がかぶってまちを練り歩いた。自分が開いたお店になまはげが遊びに来てくれたことや、獅子舞に噛みつかれたことを喜ぶ子どもが多かった。試し遊びを受けて、まちをより楽しくするためにアイデアを出し合った。「獅子舞となまはげに踊ってほしい!」という強い要望が多数。私が「無茶振りじゃない?いやだったら断るんだよ。」と声を掛けると、C児は「獅子舞は噛みついたり踊ったりして悪魔祓いをするんです。踊ります!」と力強く答えた。実は、獅子舞に興味をもったC児は本でどんな存在なのかを調べていたのだ。D児は「なまはげは踊らないから…」という反応。どこからか「なまはげは太鼓を叩けばいいんだよ!」という声。次の日の朝、C児は獅子舞の踊りについて調べ、D児は、段ボールと画用紙で大きな太鼓を作った。周りで一緒に見ていた子どもたちも「一緒に太鼓を叩きたい」と仲間入り。演奏をしていると、太鼓のリズムに誘われもう一人が仲間に加わった。わずかな時間を見付けては練習を重ねた。その姿には、「仲間と一緒にパフォーマンスを成功させて、スノータウンをもっと楽しみたい」という子どもの願いが溢れていた。

スノータウン本番、「獅子舞はじめます!」という弾む声。みんなで考えた獅子舞となまはげのコラボイベントに、それぞれのコーナーで遊んでいた子どもたちも手を止め、目を輝かせてスノータウンの中央に集まる。息の合った太鼓の音色や獅子舞の本格的なステップにギャラリーの気持ちが盛り上がっていく。獅子舞が友達に噛みついて回っていると「校長先生のこと噛んで!」ギャラリーの一人が言い、それに他の子どもたちも続く。いたずらで言っているのではない。これまでの学習の中で、「獅子舞にかじられた人は一年間幸せに過ごせる」ということをみんなで共有していたのだ。「次は副校長先生」「次は教頭先生」お世話になっている先生の魔除けをと考えたのだろうか。活動後、C児は「みんなの魔除けができてよかった」と満足気な表情で語った。スノータウンには幸せな空気が満ちていた。

子どもたちは、自由な活動の中で仮想のまちの世界観に浸り、自分の遊びを楽しんだ。その中で、ゆるやかにつながった仲間と共に冬を様々な角度から追究し、「みんなで」「冬を楽しめる」まちを次々に発展させていった。そうして2Cスノータウンは大きな盛り上がりを見せたのだ。

